

ことばの力、モダリティーの効用を考える

奨励	龍城 正明〔たつき・まさあき〕
奨励者紹介	同志社大学副学長・国際連携推進機構長 同志社大学文学部教授
研究テーマ	選択体系機能言語学・音韻論・音声学

初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

（ヨハネによる福音書 1章1―5節）

はじめに

副学長の龍城でございます。本年度、最初のチャペル・アワーに際しまして、奨励でお話しさせていただきたいと思います。

現在このキャンパスでは、仮に「今出川新棟」と呼んでいた建物が、完成に向け工事を進めております。本年度10月には完成の予定で、来年に向け、同志社大学はまた新しい一歩を踏み出そうとしております。2013年を同志社大学の一つのターニングポイントとしまして、今まで京田辺で教育をしていました文系学部の一、二年生の学生をすべて今出川に集約いたしまして、今出川と京田辺という2校地において、それぞれの学部の特徴を出しながら、新しい教育体制を創り出そうと考えております。そして、この「今出川新棟」と呼んでいました建物を、新たに「良心館」と名づけることができました。ご存じのとおり、同志社において「良心」というのは、校祖・新島が常々考えてきた、大変重みのあることばでございます。両校地にある碑、「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」ということばに代表されるものであります。

同志社は、大学・女子大学を始めとして、多くの法人諸学校を抱えており、近年開校しました同志社小学校や国際学院でも、たくさんの新しい建物を造ってまいりました。それらの建物に命名する際にも、この「良心館」という名前が候補に挙がるがありました。しかしこれまで「良心」という名前を建物に冠することは、何かの機会にとっておこう、ということで、なかなか採用されなかったのです。それがやっと、大学の、この今出川新棟に付けられたわけです。同志社大学としては、一つの完成をみたのではないかと私ども大変喜んでいて次第でございます。本年10月ごろには完成いたしますので、ぜひ皆様、足をお運びいただいて、この良心館の雰囲気を感じ取っていただければと思っています。

ことばの力

さて、本日は「ことばの力、モダリティーの効用を考える」というテーマでお話しいたします。お読みいただきました聖書箇所は、ヨハネによる福音書1章1―5節です。聖書には多くのことばが記されていますが、そのなかで、ことばそのものについて言及し、「初めに言があった。言は神と共にあった」と始まる章は、ここだけだと記憶しております。神と共にあり、そしてキリストのことばを伝える福音も、このことばによって成されていくわけであります。それほど、人間に与えられたことばというものの重みは、私どもが常に考えていかなければならないことの一つだと思っています。

私はこれまで、数度このチャペル・アワーでお話をしました。しかし、私自身の専門分野である言語学について触れることは、ありませんでした。ただ昨年、学生と、ゼミあるいは講義において話をするなかで、ことばについて考える機会というのは、案外、少ないものなのだなとつくづく感じました。ことばというものは、あまりにも我々の日常生活に身近にあり、それは我々にとってあたりまえのことで、また何気なく使っている存在であるからでしょう。そこで、神から与えられた「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」（ヨハネによる福音書 1章3節）ということばの意味を、よくお考えいただきたいのです。万物はことばによって成り、ことばの内に命があり、生じたものの内にあって、ものはことばの命であった、ということです。すなわち、ことばは命であり、光なのです。そして、その命は人びとの光であり、闇でさえもこの光を阻止することができなかったのです。この重要な意味をお考えいただきたいと思います。

また、私どもがことばについて考えるとき、とすれば動物が話す、あるいは指示を送る、そういった種類のことばと対比することも多くあります。では、動物はことばをもっているのでしょうか。広義に考えた場合、ことばの大きな役割はコミュニケーションをとること、すなわち話し手と聞き手の意思の疎通を図るものであるといえます。その視点でみれば、犬も、あるいはイルカも、またチンパンジーも、果てはミツパチに至るまで、自分たちの情報を伝え、そしてそれをコミュニケートするということでは、一種のことばをもっていると考えることができるかもしれません。

しかし、人間のもつことばというものは、このように簡単なものではないでしょう。たとえば、犬であれば、嫌いな人を見て「ウーツ」と吠え、好きな人を見て「クンクン」という。あるいは危険なものがあれば、自分の子犬に対して「ワンワン」と吠え「そこへは近寄るな」と教える。これは一つのコミュニケーションであると思います。また、ミツパチは大変賢い虫でありまして、自分たちが見つけた蜜の場所が、何m離れたどの枝のどの角度のところにあり、ということまで仲間知らせることができる、という実験結果が出ております。このことから考えますとミツパチも、また犬もサルもコミュニケーションをとることができるということです。しかし、私が常に学生諸君に言うのは、コミュニケーションということと、ことばというものを同義には考えるな、ということでもあります。すなわち、我々人間がもつことばというのは、自分たちの感情を表すことができ、また、いかに複雑なことであろうが、あるいは初めてのことであろうが、ことばを使って、それを伝達することができるのです。これを「ことばの創造性」と呼びます。皆さん方も、たとえ今までに見たことがないもの、あるいは伝えたことがないものでも、人にそれを伝えなければならぬときには、自分たちのもっていることばのすべてを駆使して相手に伝えることができるでしょう。それがことばの偉大な力であると思います。

そして、そのことばの伝え方は決して一通りではありません。我々にはいろいろな伝え方が備わっています。今日はそのことも含めてお話しさせていただきたいと思います。人間のもつことばというのは、創造性、それも無限の創造性をもっているといえます。これが、動物のコミュニケーションとは大きく異なる点であるということ、また神から与えられたこのことばの有用性・重要性というものを、しっかりと認識していただきたいのです。

ことばの役割と表現

さて、本日のテーマに用いました「モダリティー」ということばですが、初めてお聞きになる方も多いのではないかと思います。私ども言語学を研究している人間にとりましては、一つの学術用語でありまして、このモダリティーこそが、ことば本来の役割を表している基本用語であると私は考えております。簡単に言いますと、モダリティーというのは、一般に話し手の心的態度を表す文法的カテゴリーと捉えられております。他に情報・方法・ムードということで置き換えられることもございます。ムードということばは、直説法や接続法や命令法など、私どもが一般に使っております「この部屋のムードはいいね」「ここはムードがいから、ちょっとゆっくりしていこう」「いや、この場所はムードが悪いから、もっとムードのいいところに行こうよ」というように、「雰囲気」と捉えて使っている場合が多く、言語によるムードも、それと似ております。すなわち、自分の思っている内容を相手に対してどういうムードをもって伝えるのかということです。単刀直入に直説法で伝えるのか、あるいは相手に対して「こうしてくれ」と命令法で伝えるのか。あるいは「もし、こうならば」「こうすることがあったならば」というような仮定法で伝えるのか、ということです。

英語を学ぶとき、このようなムードの違いについて、明確な説明を受ける機会はありませんでしたが、大学に入られて、ドイツ語なりフランス語なり、あるいは神学のなかでのギリシア語・ラテン語などを学ばれますと、このムードという文法的な概念が大変重要であるということがわかるでしょう。これは多様な表現をもっている言語であればあるほど、ムードというものを大切にしているということです。そして、それが私ども話し手の心の内を表す一つの手段になっていることを、よくお考えいただきたいと思います。

最初に申しましたように、ことばは神から授かったものです。我々は第一言語である故に、なんの苦労もなく、日本語を獲得してまいりました。たぶん、ここにいらっしゃる多くの方が日本語を母語とされていると思います。そしてこのなかで、日本語を習得するに、「私は単語を一生懸命書いて覚えた。日本語の文法は難しい。助詞の、特に『は』と『が』が未だにわからない」というような方は、いらっしゃるはずですが、そのいらっしゃる方に、まさしく我々が日本語を母語として運用しているという証であります。そこで、私はよく学生に、「あなた方は、同志社大学で英語・ドイツ語・フランス語、あるいはスペイン語やラテン語・ロシア語、そういった言語を勉強されているでしょう。たぶん、多くの人は『英語がもっとしゃべればいい』『もっと自由に使いこなせばいいな』、つまり、まだまだ英語のことが分からない、と思っていられる。けれども、あなた方が一番知らないのは日本語ですよ」と言います。私どもはあまりにも何気なく日本語というものを話しています。そして、なんの苦労もなく習得したために、日本語がいかなる文法組織・音韻組織でできているのか、またいかなる形態をとっているのかということ、たぶん、お考えになったことはないでしょう。考えなくてよいということが、母語話者としての一つの特権でありますけれど、それが母語話者にとって一番知らないということを行わねばならないことでもあります。

皆さん方は、ネイティブスピーカーに語学を習うのが一番いいと思っていられると思います。しかし、今の話を当てはめてみますと、英語を話しているから、フランス語を話しているから、その方々がその言語の詳しい構造・音声体系・音韻、そういったものを知っているとは限りません。彼らはネイティブとして、生まれながらに使っているからしゃべれるだけであって、我々が、たとえば言語学者として少しばかり専門的な質問をしてみますと、ほとんど答えることができない、そういうことが起こってくるわけです。

先ほど少し触れましたが、日本語の助詞「は」と「が」についても、皆さん方はほとんど間違えることはないでしょう。これは日本語を母語としているからであって、「は」と「が」を間違える、我々は日本人ではないということになる。しかし、「は」と「が」の使い方に 있어서外国人から説明を求められたとき、明確に、そして簡潔に「このときは『は』になるんだよ」「なぜこれは『が』でなくて『は』なのか」ということを完璧に答えられる方が、このなか何人いらっしゃるでしょうか。言語学を勉強されていないとするならば、30%に満たないと思います。それほど言語の文法・構造というものは大変難しく、我々は自然に覚えた恩恵を享受していることを、常にありがたく思わなければならないのです。

モダリティーとは

さて、この「モダリティー」ですが、言語学的には二つに分類されます。一つは英語で「デオンティック」（拘束的・義務的）、あるいは相手に依頼するときを使うことばです。英語で言うならば“Come here.” “Study English.”。これらはなんら修飾語をもたない、直接的な命令法、すなわち義務であるわけです。それに対してもう一つの分類は、「エピステミック」（認識的）というものです。「あの人は、アメリカ人かもしれない」、「シェイクスピアは多くの劇を書いたらしい」。この「かもしれない」「らしい」という助動詞です。私どもがこれを用いるのは、「自分としては確固たる信念をもたないけれども、そうではなからうか、そのようなことであるのではないか」と推量しているときです。まさしくこれは私どもの中での認識度から出たことばであるわけです。

したがって、モダリティーというものが、話者の心的態度を表すとするならば、話の内容の義務的なこと、それともう一つは話し手の認識、という二つに分類することができます。義務と認識・様態というのが、まさしく我々の言語表現を決めている手段であると理解していただきたいのです。

たとえば、今降っている雨が、実は昨日から続いている、という場合に、「昨日、雨が降った」と言うのは、昨日雨が降っているところを見た人だけです。我々の多くは、朝起きて、濡れている道路や屋根や庭を見て「ああ、雨が降ったらいいね」と言います。さらに「今は、雨が降っているんじゃないかな」、あるいは「雨が降ったと思うんだけど」という言い方をする人もいかもしれません。すなわち、“I doubt that it rained yesterday.” このdoubtということば自体、本来ならば「雨が降った」で済むところを、人間は“I doubt.”や、“I think.”というようなことばを用いて、雨が降った状況を自分の思っている心的な態度でもって正しく伝えようとしします。この場合は、いわゆるその情報の判断をしているということになります。

それでは、自分は昨日は東京にいて、関西で雨が降ったことを知らなかった場合にはどう言うでしょうか。“I heard that it rained yesterday.”と言います。すなわち「昨日、雨が降ったと聞いたんだが」「昨日、雨が降ったらいいですね」と言っているのです。もし、こういう表現がなかったら「雨が降った」という言い方しかできないのです。今、お話ししている「モダリティー」が、いかに私ども人間の言語表現を豊かにし、かつまた自分が思っている心的内容を和らげる役目をしているのかということです。これがあるから、人間は相手に対してことばをもってコミュニケーションすることができるわけです。

相手にものを伝える、コミュニケーションすること、単純・明確に伝えるということは、大切なことです。しかしともすれば、それが相手の心を傷つけることになるやもしれませんし、あるいは、間違った情報を相手に伝えているということもあるかもしれません。そのことをできるだけ和らげ、かつまた自分をできるだけ弁護・擁護するということと変な言い方ですが、それらも含めて使うことばが、「モダリティー」であるとお考えいただきたいのです。

今、義務と認識と二つに分けられると言いましたが、イギリスの有名な言語学者であるハリデー（Michael A. K. Halliday）という人は、これをmodalizationとmodulationの二つに分けています。二つとも馴染みのないことばだと思いますが、modalizationとは、その中に含まれている蓋然性（がいぜんせい）や頻度をもって表すような表現です。もう一つのmodulationというのは、inclination（話し手の志向性）、あるいはobligation（義務）、necessity（必然性）というようなものを表します。inclinationとは、たとえば、私どもが相手に何かをお貸しするような場合、「これを貸すね」と単刀直入に言うのではなく「喜んでこれをお貸しますよ」という言い方をするることなのです。相手に「綺麗な桜が咲いていますね。一枚写真を撮りたいんですけど、カメラをお持ちですか」と聞かれたとき、「これ、どうぞ、どうぞお使いください」、「喜んでお貸しますよ」と応えることがあるでしょう。その「喜んで」あるいは「どうぞ、どうぞ」ということばが、相手をどれだけ和ませることができるか、ということなのです。

英語にも、“I’m willing to”ということばがあります。“I’m willing to lend a camera.”と言った場合、「私は喜んでカメラをお貸しますよ」というニュアンスがあります。しかし、ただ単に“Yes, I lend you my camera.”と言うと、「私のカメラを貸すよ」と、少々乱暴な表現になってしまいます。そのような言い回しが、話者の志向性といわれるものです。

ことばの伝達性と命題

さらにことばの表現として、「誰が、どうした」ということを、よくお聞きになると思いますけれども、実は、これが我々が伝えなければならない命題の根幹を成しているものなのです。たとえば「シェイクスピアは四大悲劇を書いた」。これはシェイクスピアという人物が劇を書いた。この事実を相手に単刀直入に伝えているわけです。しかしそれとは別に、「シェイクスピアは常々芝居を書いていた」「『ハムレット』はシェイクスピアが書いたかもしれない」と言うこともありますし、「『リア王』は、確かにシェイクスピアが書いたに違いない」と表現することもあります。シェイクスピアという人物は霧に包まれており、一名なのか、あるいはグループなのか、そもそも四大悲劇をはじめとする多くの劇作がシェイクスピアのものなのかどうかわからないことから、いろいろな議論が生まれてくるのです。もしも、「シェイクスピアは四大悲劇を書いた」という表現しかなければ、シェイクスピアの、あの不思議さ、あるいはあの偉大さを表現することはできないのではないのでしょうか。

さあ、ここで今、「シェイクスピアは、四大悲劇を書いた」と言いましたが、この文と、「シェイクスピアは、確実に四大悲劇を書いたに違いない」という表現、どちらの方が強く、かつまた信憑性があると思いますか。普通に考えた場合は、「シェイクスピアは、確実に四大悲劇を書いたに違いない」というように、「確実に」や「違いない」という表現が使われていると、我々はこちらの方が強いと思ってしまいます。でも本来、我々が伝えたい内容というのは、「シェイクスピアが四大悲劇を書いた」という、一つの命題に尽きるわけです。さらに先ほどのことを換言いたしますと、私どもは話者の心的態度として、いろいろな表現法をもっていますが、聞き手は、その表現法にとらわれるのではなく、話の命題となっているものは何であるかということを見極めなければならないのです。そして、「シェイクスピアは四大悲劇を書いた」、これが一番強い表現であるということも知るべきです。“You should study English.”あるいは、“You must get up at six.”と言われると、shouldやmustが使われているために「うわ、これは大変だ」と思われるかもしれませんが。しかし、単純に“Get up early every morning.”というのが一番強い表現なのです。何の余地もない。「とにかく早く起きるということを実行しろ」、ということなのです。

言語で伝達するとき、「誰が、どう言ったか」という、この命題といわれる部分が一番大切で、そこに対していろいろなものを膨らませて表現しているのです。表現には常に視点というものがありますが、一番大切なことは、「誰が」「どうしたのか」という、この二つに尽きるのです。これがproposition（命題）といわれるもので、ギリシア・ローマの時代から変わっておりません。ギリシア・ローマの場合は、名詞にあたるものをオノマーと呼び、動詞にあたるものはレーマーと呼びました。そしてこのオノマーとレーマーの二つの部分で、命題というものをつくってきたのです。人間はさらに、モダリティー、すなわち話者の心的表現を駆使することでその命題を、時には強く、またまろやかに、そして相手を傷つけないように配慮をしながら表現してきました。またそれが、我々人間がもつ言語の、極めて強い力であるということも認識する必要があるのです。

モダリティーの効用とは

さて、この話をしたのは、実は今からお話しするメイン・トピックにかかわるからなのです。この奨励の時間に皆さんに語学の話をして、「これを覚えてくれよ、こうだ」というつもりはありません。ただ、よく耳にするのは、「大学で、言語学や天文学・物理学を勉強して、一体何の役に立つの」という質問です。

そこで、天文学について一つエピソードを紹介します。今年は三つの素晴らしい天体ショーがあるということをご存じですね。しかしあくまでも一般的には、その天体ショーを見て喜ぶだけでいいわけです。そもそも、それは何の役に立つのでしょうか。アメリカの有名なテレビ番組「コスモス」の制作者だったカール・セーガンという天文学者が、小さいときに「自分は天文学者になりたい」と言った。そうすると、おじいさんに「天文学なんかやって何の役に立つんだ。お前、もう少し金の儲かる仕事を考えた方がいいんじゃないのか」と言われたそうです。確かに、天文学を学んで星の運行を知ったからって、あまりお金にはならないでしょう。しかしのちに、カール・セーガンが天体の動きや人類の歴史的な創造についてのテレビ番組や啓蒙書をつくり、広く説明することによって財産を築いたということは、知っている方も多いと思います。すなわち大学で学ぶ学問というのは、決して虚学ではありません。どこかでそれを実践学として、知らぬ間にも、意識をしなげても、それに触れる、または利用するということがあるのです。

ここでモダリティーの効用の実例を紹介しましょう。先の東日本大震災でのことです。2011年3月11日、あの未曾有の大震災が東北エリア・東日本エリアを襲いました。2012年3月10日現在で、死者は1万5854名、行方不明者は3155人となっているそうです。かくも多くの死者を出しました。このときの一番大きな問題は、地震の被害のみにとどまらず、さらに巨大津波が襲ったことです。阪神・淡路大震災のときの直接死者は5483人（平成17年12月22日の記者発表データ）でした。私も住居が芦屋にあったものですから、震災の影響をまともに受けました。しかし、震災の後、かなり早くに復興いたしました。それは近年になかった規模の大震災であったにもかかわらず被害の大きかった地域が限られていたということがあります。当時のことをよく覚えておりますが、兵庫県の名南東部に流れる武庫川を渡って大阪地域に行くと、人びとは何もなかったかのように活動していました。しかし、武庫川を一步西に入ると、尼崎・西宮・神戸のあたりは、三線あった鉄道もすべて止まってしまっていた。そして神戸の街は焼け野原。皆、戦場さながらにリュックサックを背負って歩いていた。それが当時の状況です。それでも案外早く復興した。これはひとえに皆さん方のお陰であると感謝しております。でも今回の東日本大震災では、被災地域が復興したとは未だに聞いておりません。ニュースで映像を見ても、まだまだ仮設住宅に多くの被災者が居住しており、ちょっとした風雨や雪で浸水するなど、大変なことになっています。これはやはり、地震だけではなく、大津波の影響が大きかったのではなからうかと思えます。さらに深刻な問題は、追い討ちをかけるように起こった、あの原発事故です。あれは日本だけでなく、世界中に影響を与えました。

お話ししたいのは、この大津波を受けたときに、アナウンスをした人たちのことばです。一つは、茨城県の大洗町での避難指示に関する記録です。大津波到達までに30分程度の時間的余裕がありましたので、「大津波が来ます。国道よりも上に避難してください」というアナウンスから始まりました。そして、次に本当に津波が押し寄せてくると分かったときに「大津波が来ます。今すぐ、逃げてください」と放送しました。「避難してください」から「逃げてください」に変わり、さらに30分経ち、その津波が決して3～4mではなく、10m近い大津波であることが分ると、そのアナウンサーは、「高台に避難せよ」と命令形を用いたのです。本来、避難アナウンスにおいて、命令形を使うことはほとんどないと聞いております。しかし、このアナウンサーは「高台に避難せよ」と命令形を使ったのです。それを聞いて「これは一大事」「普通の状態ではない」と悟った多くの人が高台に逃れ、無事に避難を完了し、この町ではほとんど被害者が出なかったと聞いております。

先ほど申しましたが、ものをことばで伝えるとき、いろいろな表現方法があります。そして我々のこの法治国家のなかで、人に配慮をするとき、命令法は、あまり使わないのです。私の子どもごろの小学校の先生は「おい、お前、ここで立っておい」とか「そこを読め」と言いました。ところが今は、試験問題にしても「この件について論ぜよ」とか「これについて解答せよ」という命令法をできるだけ避けて、「論じなさい」「この問題について答えなさい」と表現されます。同様に英語でも“You are required to read Hamlet.”「ハムレットを読むことを要とします」というように、“Read Hamlet.”という命令形ではなく、necessityといわれる「必要」であり、imperativeという「命令」は使っていないのです。

しかし、今回は、緊急事態に陥る人びとに「必ず避難をしなければならない」と伝える必要がある非常時だからこそ、あえて命令形を使い、それが功を奏したのです。ことばの使い方、ムード、モダリティーの使い方が、現実の場面で生かされたということなのです。このアナウンスをした人が言語学を学んでいて、こういうときには命令形を使わなければならない、こういうモダリティーを使わなければならない、と知っていたとは思いません。しかし人間は、そういった場面に直面した場合には、命令形を使う必要があることを自ずと判断で

きる、これが我々のもつことばの力なのです。相手を思いやる、そしてことばでもって相手に配慮する、これは大切なことです。でも時として、必要な場合は命令形を使うこともありうるし、また使わなければならないこともあるでしょう。そのことをよく理解して、今後、生活をしていくべきであると思っています。これが私の言う「ことばの力」なのです。

語彙の力

それともう一つ、これは文法的なことではありません。ことばそのもの、単語そのものです。これは宮城県内でアナウンスをした女性。はじめは「大津波警報が発令されました。避難してください」と言っていた。しかしその後、職員が津波を目撃して、アナウンサーに「津波が来ましたよ。3mぐらいあるらしいですよ」と報告すると、そのアナウンサーは「大津波警報が発令された」とは表現せずに「ただいま津波が襲来しています」と、「襲来」という単語を使ったということです。日本語というのは三つの語彙層をもってあります。一つは和語といわれる日本語特有の単語。次に、漢語といわれる中国から輸入したもの。もう一つは外来語。この三層のことばが、我々の日本語のなかには入り混じっているのです。先ほどの話に置き換えますと、「押し寄せる」「襲来する」あるいは「アタックする」。我々は、気づかないうちに和語・漢語・外来語の三層をその時々に応じて使い分けているということです。もっと身近な例を言いますと、予約を取りやめる場合には「ああ、それはもう取り消してもらって結構です」と言います。そして定期預金とか、もう少し法律的なものをやめる場合には「解約する」となります。「取り消す」「解約する」「キャンセル」意味はすべて同じです。でも我々はその状況に応じて使い分けている。そのことと同じように「津波が来ています」「来襲（あるいは襲来）しています」。最終的に彼女が言ったのは「ただいま、宮城県内に10mの津波が押し寄せています」ということばでした。残念ながらこのアナウンスをした若い女性は、避難することなく帰らぬ人となってしまったと聞いています。自分の仕事をそこまで全うして、そして最後は日本語の和語である「押し寄せる」という、皆にわかることばを使うことによって危機を表現しました。これも、ことばのもつ力を最大限にするための一つの選択ではないでしょうか。

おわりに

私どもは、ただ文字の上で、学問の上で、モダリティーであるとか、語彙の多層性ということを勉強するだけではありません。今回、東日本大震災の際に発せられた実例を用いて、モダリティーや語彙の効用についてお話しさせていただきました。現実の場で行われている豊かな言語表現が、いかに我々の生活上で功を奏しているかと。そのことをよく理解しながら、ことばのもつ力、あるいはモダリティーの有効性ということを、ぜひお考えいただいて、言語生活というものを過ごしていただきたいと思います。

2012年4月11日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録